

## 第四場面 八組のまとめ

「僕」は、ちよう集めをすることを両親に、あれほど反対されていたが、二年たつてもちよう集めに対する熱情は冷めることがなく、逆に絶頂にあった。このころ、エーミールが珍しいクジャクヤママユをさなぎからかえしたというわさが流れていた。「僕」は、クジャクヤママユを本の挿絵でしか見たことがなかった。そのため、このうわさは、他のもつと珍しいことよりもずつと気になった。そして、食後、外出ができればよくなる、まつすぐ隣の家の四階に上がっていた。幸い、誰にも会わなかった。そして、勝手にエーミールの部屋に入ってしまった。頭では、良くないことだと分かつていたが、どうしてもあのちようを見たいという欲望に負けてしまったのだ。しかし、「僕」が一番見たいと思ったあの斑点だけは、残念ながら、見られなかった。

白木淳奈 342

「僕」は、ちよう集めを始めてから四年ほどたった今でも、あの熱情は未だ衰えてはいなかった。そんな中、あの気味悪いエーミールがここらではまだ誰も捕らえたことのないクジャクヤママユをさなぎからかえしたということを聞いた。「僕」は、自分よりも収集が貧弱なエーミールに先を越されたことに対して「悔しさ」や「うらやましさ」がこみ上げてきた。また、一目でも実物を見たいと思ひ、エーミールの家に行った。エーミールの家にはだれもいなかったが、なぜか鍵は開いていた。「僕」は見たいという気持ちを抑え

きれなくなり、家の中に入ってしまった。エーミールの部屋まで、誰に会うこともなく到達し、部屋に入り、収集箱を手を取った。しかし、中にちようは入っていなかった。少し考え、展翅板の上にあるかもしれぬと思ひ、見てみた。ちようはそこにあつた。顔を近づけ、細かいところまで眺めた。しかし、あの有名な斑点は見ることはできなかった。

梅田旬太郎 398

「僕」は、エーミールがクジャクヤママユをさなぎからかえしたことを聞くと、すっかり興奮してしまつた。それを見せってもらうため、食後、家を飛び出し、エーミールの家へ行ったが、だれもいなかった。すると「僕」は、やつてはいけないのに、興奮して、判断できず、勝手にエーミールの部屋に入った。そして、エーミールにも言わずに、勝手に展翅板の上のクジャクヤママユを見た。しかし、あの有名な斑点だけは、紙の下敷きで見ることができなかった。

古川大樹 209

「僕」は、二年たつてもちよう集めにあきていず、情熱を持っていた。ある日、エーミールがクジャクヤママユを持っていると聞いた。エーミールの部屋に行くと、ドアが開いていた。勝手に入つて良いか分からないけど、「確かめたい」という気持ちが大きすぎて、中に入ってしまった。しかし、有名な斑点だけは見られなかった。

渡邊桃香 150

「僕」は、あのエーミールがクジャクヤママユをさなぎからかえしたという噂を確かめたくて、冷静さを

取り戻せず、欲望に負けて、ダメということは分かっているのだけど、勝手に家の中に入ってしまった。しかし、残念ながらあの有名な斑点だけは見られなかった。

田中裕瑛 121

「僕」は、どうしてもクジャクヤママユが見たくて、エーミールの部屋に入った。悪いことだと頭では分かつていても、早く見たいという欲望が抑えられなかった。エーミールの部屋に入つて、クジャクヤママユを探した。ちようをしまつている箱にないなら、展翅板だろうと思ひ、見てみると、そこにクジャクヤママユはあつた。しかし、斑点だけが見られなかった。細長い紙切れの下になつて隠れていて、残念に「僕」は思つた。クジャクヤママユを眺めているとき、「僕」は、自制心を失つていた。

国枝まり 226

「僕」は、エーミールがあのとつても珍しいクジャクヤママユをさなぎからかえしたと聞き、まず何をおいてもそれを見たかつた。だからエーミールの家に行き、ちようを見ようと思つた。だが、あいに、家になかつたが、鍵が開いていたので、絶対にやつてはいけないと分かつていたのに、クジャクヤママユを見たという気持ちが勝つて、入ってしまった。だが、挿絵でしか見たことがないあの美しい斑点が自分の目に入れば、勝手に入つたことなどどうでもいいと思つていた。ほかの美しいところは見れたが、あのどれと比べても美しい斑点が見られないのは残念だつた。

中嶋 翔 261